

台東区立黒門小学校

平成25・26年度 台東区教育委員会研究協力学校

21.5世紀を拓く～「よい授業」の追究を通して～

未来を拓く黒門の子

台東区立黒門小学校 校長 千木良康志

台東区立黒門小学校では、これまでの研究の成果を踏まえつつ、激しい変動が予想される未来社会を21.5世紀と具体的に位置付け、子供が新たな知を拓くために必要な資質・能力を育成する黒門教育の推進に努めてまいりました。

今日の社会は、知識基盤化、国際化、情報化が一層進展し、それにより競争が激化し、我が国を取り巻く危機的状況が広がってきています。少子高齢化やグローバル化の進展、雇用環境の変化など、日本社会は多岐にわたる課題に直面しており、先行きの不透明感や閉塞感が強まり、人間関係の希薄化が進む中で、人と人との絆の大切さが改めて見直されています。

私たちは、このように変化する時代の潮流や未来への課題を踏まえ、夢と志をもち、互いに磨き合い、様々な分野において豊かで創造的な知性を発揮し、主体的に未来を生き抜く力を身に付けた子供を育てることが必要であると考えました。さらに、人間性豊かな社会を築くためには、多様性を認め合い、他と協働し、共に支え合う人間関係を育てることが求められているとしました。

時代の大きな変化を踏まえ、21.5世紀に主体的に生き抜く子供の育成という観点から、学校は新たな視点をもって創造性豊かな教育を推進していかなければなりません。黒門小学校では、「学校は人との関わりを通して、その有効性を実感し、より多くの人が自分の仲間であることを学ぶ場」という学校観と、「子供たちは有能である」という子供観を前提として研究に取り組んできました。それは、「かしこさ／自立・自律」「ひらめき／創造」「かかわり／共生」というキーワードとなり、そのキーワードを分科会名とした研究に発展しました。その結果、21.5世紀をよりよく生きるために必要な資質・能力を育成することが、今こそ私たちがやらなければならないことであり、新たな知を拓くための「よい授業を追究する」ことであるという知見を得ました。

今回、平成25・26年度台東区教育委員会研究協力学校の指定を受け、「21.5世紀を拓く～「よい授業」の追究を通して～」という研究主題のもと、研究を進められたことが、黒門教育の一層の充実につながるとともに、台東区の教育や子供たちの生き方に一石を投げられたと考えております。このような貴重な機会を与えて下さいました台東区教育委員会をはじめ、本校の研究に多大なご示唆を与えて下さいました講師の中田正弘先生に衷心よりお礼申し上げます。



挨拶

台東区教育委員会 教育長 和田人志

平成23年度から全面実施となった学習指導要領では、子供たちの現状を踏まえ、確かな学力、豊かな人間性、健やかな体といった知・徳・体のバランスのとれた力である「生きる力」をより一層育むことを目指し、教科等の授業時数の増加、社会や科学技術の進展に伴い必要となる知識・技能についての指導など、様々な面での授業改善が謳われています。

台東区教育委員会におきましても、「学校教育ビジョン」並びに「アクションプラン」を策定し、台東区のまち全体を「学びのキャンパス」と捉え、学校・園、家庭、地域のまち全体で子供たちを教え育み、心豊かな人間性を培うことを目指しております。また、学校においては言語活動を取り入れた授業の充実を図り、自ら考え判断し表現することができる児童の育成を重視し、激しい社会の変化に柔軟に対応し、これからの社会を生き抜く力を子供たちが身に付けていける教育を推進しております。

そのような折、台東区立黒門小学校では、「自立・自律」「創造」「共生」を研究のキーワードに掲げ、「21.5世紀」という子供の未来をしっかり見据えた実践的な研究を進めてこられました。特に「よい授業とは何か」という学校教育の原点に今一度立ち返り、目の前の子供たちの可能性を最大に引き出す授業を追究され授業研究を積み重ねてきた功績は大きいと考えております。

各学校におかれましては、本校における取組や研究・実践発表の内容を教育活動に取り入れることで、より一層子供達に未来を生き抜く確かな力を育成していただけるものと確信しております。

最後になりましたが、本校の研究を推進するにあたり、丁寧にご指導・ご助言を賜りました講師の先生方に心から感謝申し上げます。また、本校の研究に熱心に取り組んでこられました、千木良康志校長先生、そして教職員の皆様方のご努力に対しまして、深く敬意を表します。

研究のグランドデザイン

<研究主題設定の理由>

教師として、児童をよりよく育てていくには「よい授業」を行う必要がある。しかし、「よい授業」とは何かという疑問に対する明確な回答はない。

今、目の前にいる児童が、これからの社会を生き抜き、成人として活躍するのが、21.5 世紀である。この 21.5 世紀をよりよく生きるために必要な資質・能力の育成を念頭におくことが、「よい授業」づくりを目指す教師にとって根底となるべきものと考ええる。

そこで、本研究では、このような資質・能力を育成するための「よい授業」づくりを目指し、研究主題を設定した。

<研究仮説>

児童が自律的に学びを進める「よい授業」をすれば、21.5 世紀をよりよく生きるために必要な資質・能力が身に付くだろう。

<学校教育目標>

やさしい子
たくましい子
考える子

教師の願い

保護者や地域の願い
台東区の教育目標

<児童の実態>

- ・指示されたことを素直に受け止め、学習に前向きである。
- ・学習塾に通う児童が多く、基礎的・基本的な学習内容への理解度は高い。
- ・思考力、表現力に乏しい面が見られる。

<21.5 世紀の予測>

- ・ICT 化、電子化、ユビキタス社会
- ・少子高齢化（4 割が 6 5 歳以上）
- ・人と人との関わりの希薄化
- ・生産性の低下
（雇用形態、就業年齢層の変化）
- ・グローバル化
- ・多人種社会

<研究主題>

21.5 世紀を拓く～「よい授業」の追究を通して～

<黒門小の目指す「よい授業」>

児童が自律的に学びを進める

- ①学習課題の設定は、児童と教師が共に行う。
- ②児童の学習状況は、児童自身が把握する。
- ③児童への支援は、必要を訴えた児童を中心に行う。
- ④児童が、思考を深めるワードを使いこなすことができる。



<目指す児童の「未来像」>

かしこさ

課題に対して見通しをもち、自ら考え解決できる。

ひらめき

既存知を活用して、新しい知にたどりついている。つまり、「あ、そうか」にたどりつくことができる。

かかわり

他者の考えを受け止め、自分の考えを再構築できる。
互いを尊重し合いながら自己表現ができる。

*本研究では、「21.5 世紀をよりよく生きるために必要な資質・能力」を、「未来像」と表現した。
*この未来像は、未来のゴールイメージであり、短期目標ではない。

<「よい授業」づくりに向けて>

①見通しをもった学習計画・課題の設定

学習課題を明確につかませ、解決方法の検討、解決への取り組み（追究活動）の積み重ね、結果・考察などの学習の流れを構築していく。

②「いまここカード」の活用・日常化

自分が現在どの段階にいるのかを 4 段階に分けて示し、学習活動に臨むようにさせる。4 色のカードを利用して自分の段階を視覚的に示すとともに、その段階によって適切な支援を自ら求められるように、日常的に指導する。

自力解決困難 ← 自力解決可能
赤：教師の助けが必要 黄：友達の助けがほしい 緑：解決の見通しはもてている 青：自分の力だけで大丈夫

③自力解決・学び合い・支援方法

児童自らの課題解決のための学習活動に、柔軟性や自由度を高める。自ら場を動いて、必要と感じた資料を求めたり、友達と学び合ったりすることを可能とする。

④思考を深めるワードの日常化

「比べる」「つなげる」「自分だったら」「合わせると」などの投げかけを日常的に行い、児童の思考・発想を促す。

<よい授業づくりの検証方法>

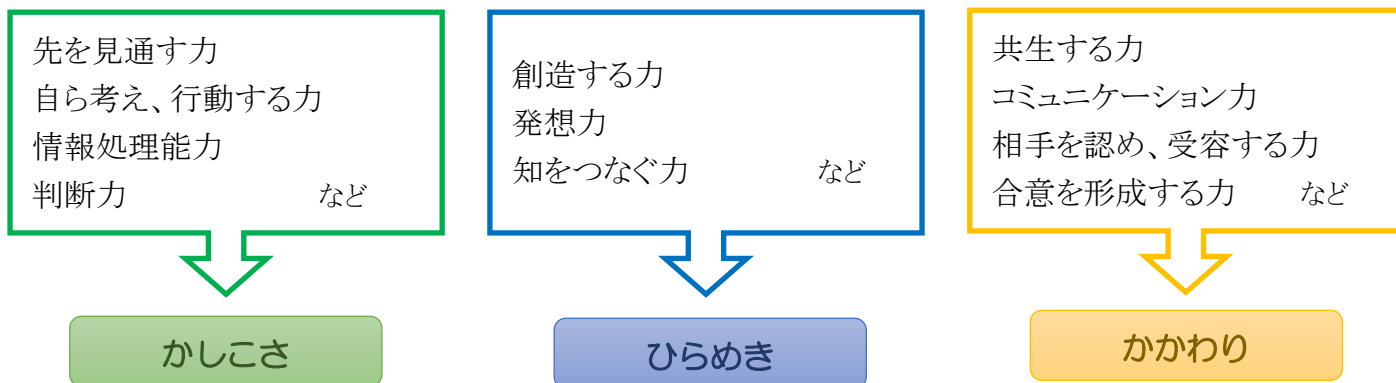
- ワークショップ型・授業実践リフレクションを取り入れ、子供・教師の事実（行為・発言・つぶやき・記述など）をもとに、授業者及び参観者が協同で授業を振り返り、授業者のみならず、参観者も自身の授業実践に対する省察を行えるようにした。
- 協議会では、小グループで、付箋を使いながら「仲間わけ」「関連付け」しながら、ディスカッションする。このようにすることで、授業の構造化を図った。

アンケート結果から見た「未来像」

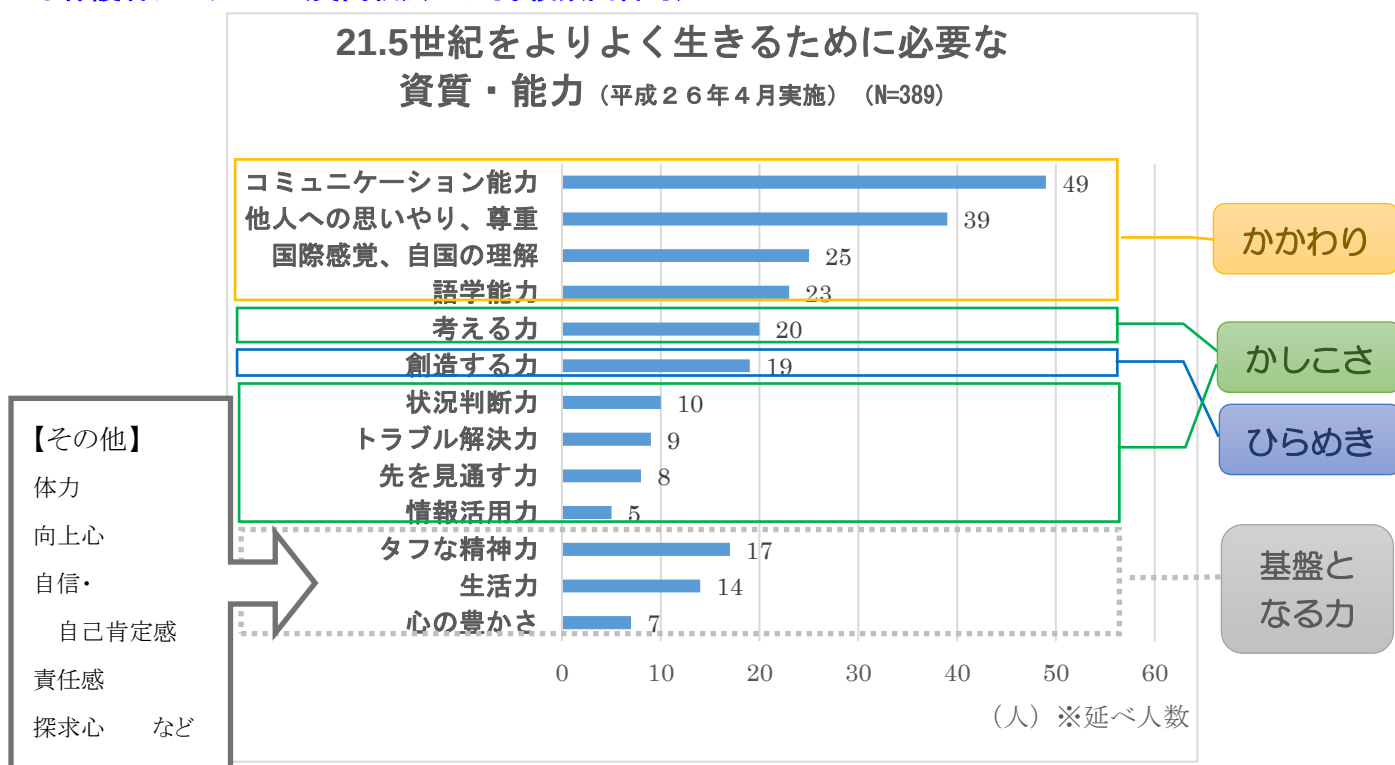
本研究を進めるにあたり、21.5 世紀をよりよく生きるために必要な資質・能力は何かを探るため、本校教員と保護者にそれぞれアンケート調査を行った。

21.5世紀に、社会の中心として活躍し、よりよく生きるためには、どのような資質・能力が必要になると考えられるか。

○教員アンケート（ブレインストーミングの後、KJ 法により整理した。複数回答可）



○保護者アンケート（質問紙法による。複数回答可）



本校教員、保護者それぞれのアンケート結果より、21.5 世紀をよりよく生きるために必要な資質・能力を大きく分類すると、以下の4つになると考えた。

かしこさ

ひらめき

かかわり

基盤となる力

授業の中で育てたい資質・能力

このうち、本研究において授業の中で育てたい資質・能力をこの3つとし、それぞれ分科会を設置して研究を進めることとした。

かしこさ分科会

1 分科会の目指す児童の「未来像」

＜未来像「かしこさ」の具体的な姿＞

課題に対して見通しをもち、自ら考え解決できる。

「かしこさ」を伸ばすのは、特に、「課題解決のための計画づくり（導入）」と「単元の学習課題の検討・解決（終末）」の場面であると考えた。学習過程の工夫、柔軟な時間設定、リフレクションの導入を通して、上記の姿を追究する。

2 実践

＜授業実践＞ 第5学年理科 「物のとけ方」

本時の流れ

- (1) 本時のめあてを確認する。 **課題を解決するために実験方法を考えよう**
- (2) グループで決めた本時の課題について、個人で結果を予想する。
- (3) グループで予想と理由を伝え合う。
- (4) グループで実験方法を考える。
- (5) 学習を振り返り、次時へつなげる。

手だて

(1) 学習過程の工夫

課題に対して見通しをもち自ら考えさせるために、8単位時間分の学習計画を立てさせ、学習課題を解決するために必要な方法を十分検討させる。

(2) 柔軟な時間設定

問題に対する児童の疑問や考えを引き出し、学習計画を児童が自ら立てることができるように、単元の時間設定にゆとりをもたせていく。

(3) リフレクションの導入

課題に対して様々な観点から解決する方法を検討させ、個人の考えを深める。また、課題に対して正対しているかどうかをグループで考える「リフレクション」を活発に行わせ、解決への取り組みを精選させていく。

協議会での焦点

- ・グループでの話し合いのさせ方について
- ・教師のかかわり方、修正のさせ方について
- ・用具の扱い方等の指導事項の取り上げ方について

3 成果と課題

- ◇課題解決のために必要な方法を十分に考え学習計画を自ら立てることにより、見通しをもって学習する能力を高めることができた。
- ◇グループ内での話し合いを活発に行い、課題を解決していくことで、自律的に学習を進める姿勢が育ってきた。
- ◆グループで課題について検討する中で解決の見通しが立たない時、他グループとの交流を促すための手だてが必要である。
- ◆学習課題を解決するために必要な方法を十分に検討させ、短時間で児童が自ら学習計画を立てることができるように指導していく必要がある。

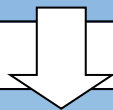


ひらめき分科会

1 分科会の目指す児童の「未来像」

＜未来像「ひらめき」の具体的な姿＞

既存知を活用して、新しい知にたどりつく。
つまり、「あ、そうか!」にたどりつくことができる。



ひらめきの瞬間は、1単位授業内で、幾度かのチャンスがある
と考える。課題把握・解決の見通しの際や自力解決、学習のまと
めの際などそれぞれの場面で、ノートや掲示資料から既存知の活
用を促したり、児童同士の話し合いの場を教室に設定したりする
などして、上記の姿を追究する。



2 実践

＜授業実践＞ 第5学年算数科 「面積の求め方を考えよう～四角形と三角形の面積～」 本時の流れ

- (1) 本時の問いと流れをつかむ。 平行四辺形の面積の求め方を考えよう
- (2) 平行四辺形の面積の求め方を考える。
- (3) 考えを発表し合い、検討する。(それぞれの考えの共通点や相違点を明らかにする。)
- (4) 面積を求めて分かったことをまとめ、学習感想を書く。

手だて

(1) 既存知の蓄積

図や数直線などを用いて考え方や計算の仕方を分かりやすくノートにまとめさせることで、自分の考えをまとめたり、振り返ったりすることができるようにする。ノートは、発想を練ったり自分のがんばりや、理解の深まりを振り返ったりすることができるポートフォリオとしての役割とする。代表的な考えや学習した内容については教室に掲示をし、「算数のタネ」として新たな学習の手がかりとしていく。

(2) 既存知の活用

教室掲示やノートにある、今まで学習で出てきた考え方や学習した内容を振り返らせることで課題に見通しを立てやすくする。既習事項から「何か使える考えはないか」、過去の経験から「同じような場面はなかったか」と類推的に考える習慣を常にもたせることで「ひらめき」を促す。

(3) 学び合いの場の設定

自力解決が困難な児童に対し、話し合いの場を設ける。コーナーに移動し、「何に困っているか」「今まで学習したことは何か」「自分だったらどうするか」などについて話し合わせ、自力解決のヒントを得るようにさせる。また、自分の考えを発表し合うことで、主体的に友達の考えと比べて同じ考え、違う考えに触れることにより、よりよい考えを見出すことにつなげる。

協議会での焦点

- ・課題解決を自分で進めることが苦手な児童への支援について
- ・学び合いの場での児童同士のかわらせ方について

3 成果と課題

◇教室掲示やノートから使える考えがないか探そうとする姿が見られるなど、既存知を使って自力解決していくことが浸透してきた。
◇思考を深めるワードを活用することにより、友達と自分の意見の関連に目が向けられるようになってきたので、新たな「ひらめき」でもあるよりよい考えを見出すことにたどりつくようになってきた。

- ◆学習状況を児童自身が把握し、適切な場、支援を自ら求められるようになるための手だてが必要である。
- ◆個人の「ひらめき」を全体で共有し、既存知とする方法をどのようにしていくか追究していく必要がある。

かかわり分科会

1 分科会の目指す児童の「未来像」

<未来像「かかわり」の具体的な姿>

他者の意見を受け止め、自分の考えを再構築できる。
互いを尊重し合いながら自己表現ができる。

話を聞くときは相手の気持ちを考えること、話すときは言葉を選ぶことなどのかかわりの方法を日常的に指導する。また、かかわることによって達成できる課題や、かかわりの場を意図的に設定することによって上記の姿を追求する。



2 実践

<授業実践> 第3学年国語科 「詩を読もう『紙ひこうき』『夕日がせなかをおしてくる』」 本時の流れ

- (1) 学習のめあてを確認する。 詩の景色を想像して音読しよう
- (2) 写真から詩の情景を思い起こす。
- (3) 詩「夕日がせなかをおしてくる」を読み、それぞれが思い描いた情景を伝え合う。
 - 詩を読んで考えたことを、個人でワークシートに記入する。
 - グループで互いの考えを交流する。
 - 学級全体で考えを交流する。
- (4) 情景を思い浮かべながら音読し、本時の学習の振り返りを行う。

手だて

- (1) 安心して自己表現ができる学級づくり
友達とかかわるときには相手の気持ちを考えること、言葉選びに気を付けることを日常的に指導し、発言を肯定的に受け止める雰囲気をつくる。
- (2) 目的に応じた交流活動と場の設定
じっくりと意見交換をするために、3～4人のグループ活動とする。また、お互いのワークシートを見合いながら話が進められるよう、児童同士の距離が近い場を設定する。
- (3) 教師の役割
かかわりの際は、教師は必要に応じて助言や意見の整理を行うなどの「つなぎ役」に徹することで児童の学習活動を保障する。

協議会での焦点

- ・教師は、児童の意見の自由度をどこまで許容すべきかについて
- ・かかわりの中で自分の考えを深めさせる手だてについて

3 成果と課題

◇友達との交流の後に、考えたことを追記する姿が見られた。考えに広がりが出たことの表れと考えられる。

◇少人数のグループ活動において、お互いの意見にしっかりと耳を傾け、友達の意見を受け止める姿が見られた。

◆教科のねらいも達成するためには、児童の発達段階に応じて児童のかかわりに関する活動を教師が意図的にコントロールする必要がある。

◆児童にいかに関心意識をもたせ、そこから離れずにかかわり合いを深めさせるかを考えることが必要である。

研究の成果と課題

【研究の成果】

- ◇「自ら解決に向けて動き出す子をよしとし、座ってお利口になっているだけにしない」とする、黒門小の目指す授業づくりに対する基本的な考えをまとめることができた。
- ◇「よい授業」を考えることで、授業づくりの意識や参観の仕方が変わった。
- ◇ワークショップ型の研究協議会を通し、授業の中の教師の指導と子供の事実を関連付けて成果と課題をとらえたことで、発問や資料提示の仕方などの授業改善に生かすことができた。

【研究の課題】

- ◆「自ら解決に向けて動き出す子をよしとし、座ってお利口になっているだけにしない」とする、黒門小の目指す授業づくりに対する基本的な考えを、児童や保護者にも浸透させていく必要がある。
- ◆教科のねらいの達成と、未来像として設定した資質・能力の育成との両立が難しい面がある。この二者の折り合いをどう付けていくかが課題である。未来像の評価規準を設定していくことも視野に入れる必要がある。
- ◆自ら解決に向けて動き出せない児童に対して、どのように指導・支援していくか検討していく必要がある。
- ◆検証結果を数値などでは表しづらく、何をもって成果や課題とするかが見えづらい。長く研究を続けていかなくてはならない。

ご指導いただいた講師の先生

平成25・26年度

帝京大学大学院教職研究科 教授

中田 正弘 先生

台東区教育委員会指導課 指導主事

鎌田 悦子

研究に携わった教職員

平成26年度

校 長	千木良康志	理 科 T T	初谷 京子	講 師	小栗 歩
副 校 長	瀧島 和則	音 楽	○齋藤 弥生		中村 典子
1 年 1 組	栗田由紀子	図 画 工 作	平塚 香織		貞森 裕子
	五十嵐龍一	養 護	橋詰 智子		篠原くみ子
1 年 2 組	○板井 信孝	きこえとことば	松井 伸一		田中 幸
2 年 1 組	○深町奈緒子		林 さおり	スクールカウンセラー	脇川 貴臣
2 年 2 組	堀 有希		菊池 理恵		橋立 藍子
3 年 1 組	依藤 亜矢		宮崎 美幸	図 書 司 書	一瀬 藍
3 年 2 組	◎本多 泰介		小瀬川智一	育 休	川畑 裕子
4 年 1 組	○池田 直亮		山岸 正太	平成25年度	
4 年 2 組	村松 真帆	学 校 事 務	丸 康夫	石田 隆	松下 旭
5 年 1 組	○松本 大将	栄 養 士	飯田 里子	清水 宏美	永塚 敬子
5 年 2 組	椎名 景子	講 師	松尾みさほ	古平 直子	志村 知
6 年 1 組	○海野 慧一		坂本 武夫	貝瀬 有美	森山 静昭
6 年 2 組	本間 忠明		大島万里子	◎研究推進委員長	○研究推進委員